

## 第2章 ハローワークに来所した中途退学者の実態① ：学校時代と中退後の生活を中心に

### 第1節 はじめに

本章では、「大学等を中途退学された方の働き方と意識に関する調査」をもとに、ハローワークに来所した大学等を中途退学した者（以下、中退者）の実態について、特に1）中退した学校での生活と中退理由、2）中退後の生活状況と意識の側面に着目した分析をおこなう。そして、つづく第3章では、中退後の就職活動について検討していく。

本調査は、大学等中退者の学校生活や中退理由、中退後からこれまでの仕事・生活状況等を尋ねる項目を含んでおり、大学等中退者の実態を把握する上で貴重なデータである。もちろん対象がハローワーク来所者に限定されることなどから、ここでの結果を中退者全体に敷衍し論じることは難しいが、大学等中退者の特徴について、中退以前だけでなく、中退以後の状況も含め多角的に考察できることの利点は大きいと考える。

本章で使用するデータは、下記のとおりである。なお、本調査に関しては、序章でもその概要を説明している。

#### ● 使用するデータ

調査名：「大学等を中途退学された方の働き方と意識に関する調査」（以下、ハローワーク調査）

調査期間：2014年8月～11月

調査対象：全国のハローワークを利用する大学等中退者（回収数：1,107票）。なお、分析では、年齢が39歳以下の若年者に対象を限定し、無効票、および年齢が40歳以上であるケースは除いた。そのため、分析対象者数は、1,095名である。また、大学院中退者に関しては、分析には使用しているが、ケース数が少ないため、参考値としてのみ掲載することとした。

さらに、以下では、中退者と卒業者の比較のため、他の調査データの分析結果も一部利用している。それらの調査データについては、下記のとおりである。

- 1) 「大学生のキャリア展望と就職活動に関する実態調査」（以下、2005年大学生調査）：2005年10月～11月に、全国の4年制大学（医歯学・看護学・宗教学の単科大学を除く）276校の4年生（医学部、歯学部、看護学部を除く）を対象に、JILPTが実施した。有効回答票数は、18,509票。この調査の概要については、労働政策研究・研修機構（2006）を参照。
- 2) 「第3回 若者のワークスタイル調査」（以下、ワークスタイル調査）：2011年2月～3

月に、東京都在住の20代男女を対象に、JILPTが実施した。有効回答票数は、2,058票。この調査の概要については、労働政策研究・研修機構（2012）を参照。

## 第2節 中退した学校での生活と中退理由

本節では、中退者の学校での生活状況、中退をした理由やその背景について検討する。

### 1. 分析対象者の基本情報、および中退した学校・専攻・学年

はじめに、分析対象者の基本情報について確認しておこう。図表2-1に掲載したのが、分析対象者の男女比、年齢構成、学校の種類（以下、学校種と同義）の構成である。

第1に、男女比を見てみると、全体のうち、61.4%が男性、38.1%が女性となっており、6割程度を男性が占めていることがわかる。

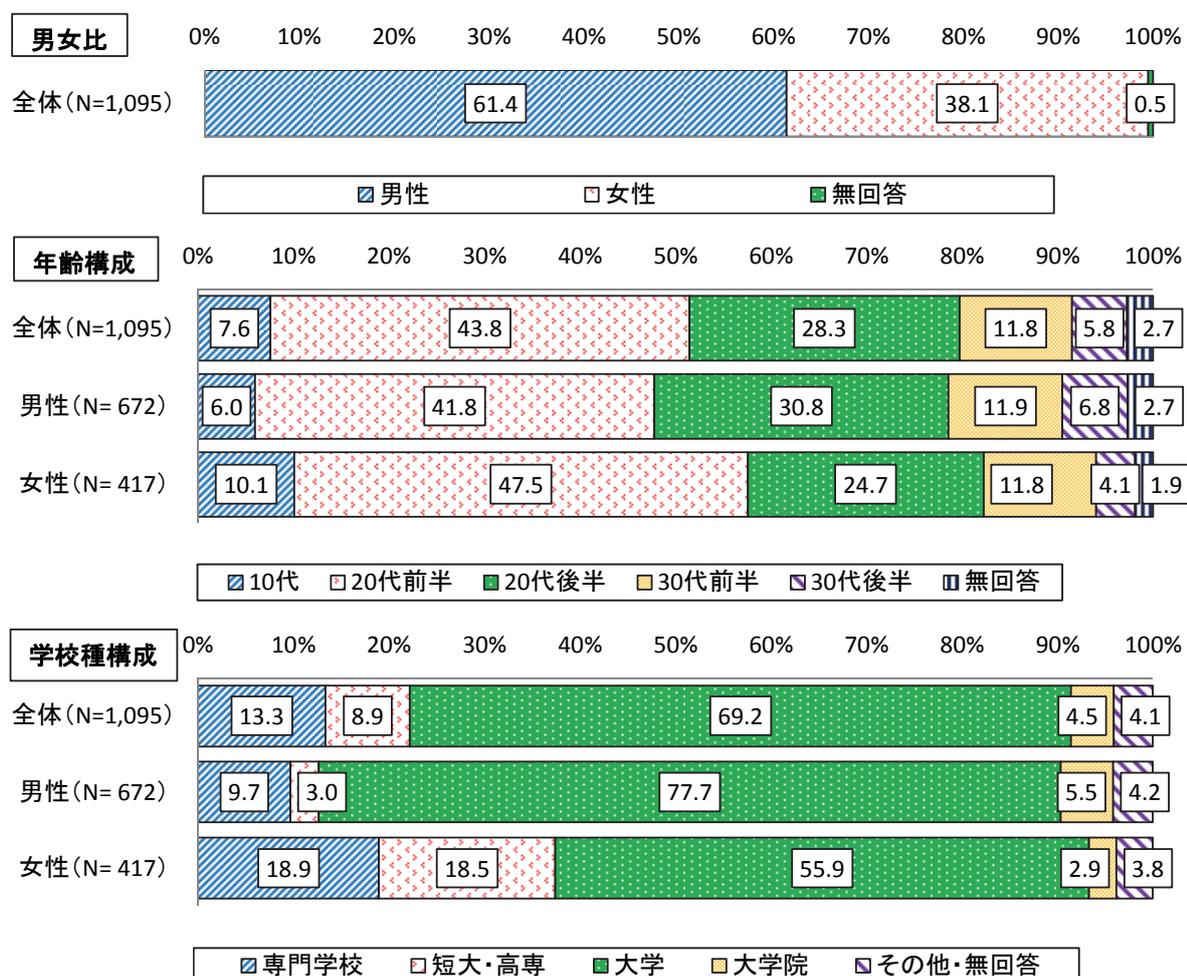
第2に、年齢構成を見てみると、全体のうち、7.6%が10代、43.8%が20代前半、28.3%が20代後半、11.8%が30代前半、5.8%が30代後半となっており、20代以下の者で8割程度を占めている。また、男女別に年齢構成を見ると、男性よりも女性で10代と20代前半の者の割合が高くなっている。女性の場合、後述するように、専門学校や短大を中退した者の割合が比較的高いため、大学中退が多くを占める男性よりもハローワーク利用者の年齢層が低くなっているのではないかと推測される。

そして第3に、中退した学校の種類を見てみると、全体のうち、13.3%が専門学校、8.9%が短大・高専、69.2%が大学となっている。今回の分析対象者の約7割が大学中退者であることがわかる。ただし、男女別に学校種の構成を見ると、男女で違いがある。すなわち、男性では専門・短大・高専の割合は約13%であるが、女性では、専門学校が18.9%、短大・高専が18.5%と男性よりも高い割合となっている。ちなみに、男性の短大・高専カテゴリには高専中退者が、女性の同カテゴリには短大中退者が多く含まれている。

このように男女によってハローワークに来所する中退者の学校種の構成は異なると考えられるが、学校種ごとの男女比はどのようになっているだろうか。その結果を示したのが、図表2-2である。図表2-2の左表を見ると、専門学校では女性が半数以上、短大・高専では女性が8割程度、大学では男性が7割程度を占めていることがわかる<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> ただし、性別・無回答を除いた割合。

図表 2-1 分析対象者の男女比、年齢構成、学校種構成



図表 2-2 中退した学校の種類、大学・専攻分野ごとの男女比

	性別		合計	
	男性	女性	%	N
専門学校	45.1	54.9	100.0	144
短大・高専	20.6	79.4	100.0	97
大学	69.1	30.9	100.0	755
大学院	75.5	24.5	100.0	49
合計	61.7	38.3	100.0	1,089

	性別		%	N
	男性	女性		
人文科学	54.2	45.8	100.0	131
社会科学	77.1	22.9	100.0	249
理・工・農	85.6	14.4	100.0	188
保健	50.0	50.0	100.0	44
教育	55.6	44.4	100.0	27
芸術・家政	38.6	61.4	100.0	44
その他	51.4	48.6	100.0	37
合計	69.0	31.0	100.0	720

注: 性別・無回答は分析から除いた。右表では、学部・専攻の無回答も分析から除いた。また、学校種類のその他・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。

つぎに、分析対象者が中退した学校での専攻分野を見よう (図表 2-3)。全体を見ると、社会科学の割合が最も大きく 28.8% であり、理・工・農 (24.2%)、人文科学 (14.4%) がそれに続いている。また、男女別には、男性で社会科学 (34.9%)、理・工・農 (33.6%)、女性で医療・保健・衛生 (19.8%)、社会科学 (19.3%) の割合が高くなっている。

ただし、これは、図表2-2の左表で検討した学校の種類による男女比の違いを反映したものだと考えられる。そのため、学校種ごとに専攻分野を見ていくと、専門学校では医療・保健・衛生(51.1%)、短大・高専では教育・福祉(29.2%)や芸術・服飾家政・文化教養(26.0%)、大学では社会科学(34.6%)、理・工・農(26.1%)の割合が高くなっている。なお、大学について専攻分野別に見ると、特に社会科学、理・工・農で男性の割合が8割前後と高い(図表2-2の右表)。

図表2-3 中退した時の専攻分野

	学部・専攻							合計		
	人文科学 (教養含)	社会科学 (商業実務 含)	理・工・農	医療・保健・ 衛生	教育・福祉	芸術・服飾 家政・文化 教養	その他・分 類不能	%	N	
男性	専門学校	—	9.7	27.4	35.5	8.1	19.4	—	100.0	62
	短大・高専	0.0	20.0	50.0	5.0	10.0	10.0	5.0	100.0	20
	大学	14.3	38.6	32.4	4.4	3.0	3.4	3.8	100.0	497
	大学院	8.8	35.3	50.0	5.9	0.0	0.0	0.0	100.0	34
	合計	12.1	34.9	33.6	7.7	3.6	5.0	3.3	100.0	614
女性	専門学校	—	14.3	3.9	63.6	5.2	13.0	—	100.0	77
	短大・高専	7.9	6.6	3.9	7.9	34.2	30.3	9.2	100.0	76
	大学	26.9	25.6	12.1	9.9	5.4	12.1	8.1	100.0	223
	大学院	33.3	16.7	25.0	0.0	16.7	8.3	0.0	100.0	12
	合計	18.0	19.3	9.3	19.8	11.3	15.7	6.4	100.0	388
男女計	専門学校	—	12.2	14.4	51.1	6.5	15.8	—	100.0	139
	短大・高専	6.3	9.4	13.5	7.3	29.2	26.0	8.3	100.0	96
	大学	18.2	34.6	26.1	6.1	3.8	6.1	5.1	100.0	720
	大学院	15.2	30.4	43.5	4.3	4.3	2.2	0.0	100.0	46
	合計	14.4	28.8	24.2	12.4	6.6	9.2	4.5	100.0	1,002

注:学部・専攻の無回答は分析から除いた。また、学校種類のその他・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。

ちなみに、学校基本調査における関係学科別学生数の比率と比較して、今回対象となった中退者でのそれは大きく異なるのだろうか。今回の対象者の年齢は10代から30代までと広範囲であるため、単純に両者を比較できないが、参考までに平成26年度学校基本調査の結果を掲載する(参考図表2-1)。

この結果から、全体(男女計)では、在学生と比較して、中退者で以下の傾向が読み取れる。1) 専門学校では医療・保健・衛生の割合が約6ポイント高く、芸術・服飾家政・文化教養の割合が約9ポイント低いこと、2) 短大・高専では芸術・服飾家政・文化教養の割合が約10ポイント高く、理・工・農の割合が約17ポイント低いこと、3) 大学では理・工・農の割合が約5ポイント高く、医療・保健・衛生の割合が約6ポイント低いことである<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> なお、ポイントは(中退者での割合-在学者での割合)の値。

参考図表 2-1 平成 26 年度学校基本調査における関係学科別生徒・学生数

	関係学科別							合計		
	人文科学 (教養含む)	社会科学 (商業実務 含む)	理・工・農	医療・保 健・衛生	教育・福祉	芸術・服飾 家政・文化 教養	商船・その 他	%	N	
男性	専修学校	—	9.3	25.3	33.8	4.9	26.7	—	100.0	294,376
	短大・高専	2.2	5.0	79.5	3.3	4.3	2.9	2.8	100.0	59,829
	大学	8.9	38.4	30.6	8.6	5.4	1.9	6.1	100.0	1,434,244
女性	専修学校	—	10.7	3.6	54.4	7.8	23.5	—	100.0	365,076
	短大・高専	10.7	7.6	7.8	8.5	37.0	21.6	6.9	100.0	125,866
	大学	21.8	25.4	9.4	16.0	9.9	10.2	7.3	100.0	1,117,778
男	専修学校	—	10.1	13.3	45.2	6.5	24.9	—	100.0	659,452
女	短大・高専	7.9	6.7	30.9	6.8	26.5	15.5	5.6	100.0	185,695
計	大学	14.5	32.7	21.3	11.9	7.3	5.5	6.7	100.0	2,552,022

注:「平成26年度学校基本調査」をもとに作成。大学の医療・保健・衛生は、医学・歯学・薬学に看護・その他も含めた値。

ただし、この結果を解釈する上で、中退者の男女比が在学者のそれと異なることに留意する必要がある。なぜなら、両者の男女比を比較すると、専門学校では男女比がほぼ同じであるが（ともに男性割合が約 45%）、短大・高専では中退者に占める男性割合が 20.8%で在学者の 32.2%よりも低く、大学では中退者に占める男性割合が 69.0%で在学者の 56.2%よりも高いからである<sup>3</sup>。

そこで、男女別に分野構成を見てみると、男女で傾向に違いがある。具体的には、在学者と比較して、今回対象となった中退者では以下の傾向が見られる。すなわち、1) 専門学校に関しては、男性で教育・福祉の割合が高くなるが、女性で医療・保健・衛生の割合が高くなること、2) 短大・高専に関しては、男性で社会科学の割合が高くなるが、女性で芸術・服飾家政・文化教養の割合が高くなること、3) 大学に関しては、男女ともに人文科学の割合が高くなる傾向がおもに確認された<sup>4</sup>。

以上、男女で傾向に違いはあるが、専門学校では医療・保健・衛生、大学では男性の中退者が多い理・工・農や人文科学で中退者が生み出されやすい傾向があると言える。また、短大・高専では、特に短大の、女性が多い芸術・服飾家政・文化教養で中退者が輩出されやすいことが、学校基本調査との比較から指摘できるだろう。

では、ここでハローワーク調査の分析に戻り、中退したときの学年について見てみよう（図表 2-4）。中退時の学年に関しては、全体の 4 分の 1 以上（25.7%）が 1 年生までに中退をしており、特に女性で 38.0%とその傾向はさらに強い。また、学校の種類別には、専門・短大・高専で 1 年生の割合が最も高く、大学では 2 年生、ついで 4 年生以上での中退割合が高くなっている。この大学での中退学年については、例えば、A 大学のケース記録（付属資料）で指摘されているように、必要単位の不足等による 2 年次留年と 4 年次での卒業論文・研究未着手が大きく関わっていると推測される。ただし、回答者によって、中退した学年の答え

<sup>3</sup> なお、男性割合は、中退者については図表 2-3、在学者については参考図表 2-1 の合計（N）をもとにそれぞれ算出した。

<sup>4</sup> ここでは、（中退者での割合－在学者での割合）のポイント差がプラスに最も大きい専攻分野のみ挙げている。

方（実質的な在学年数か否かなど）は異なる可能性があり、また中退した学校によって、進級制度にはヴァリエーションがあると考えられる。

さらに大学について専攻分野別に見ると、保健、芸術・家政、その他では2年生までの、それ以外では3、4年生での中退者割合が高い結果となっている（図表2-5）。早い段階から専門性の高い教育をおこなう専攻分野のほうが、早期に中退決定をする学生が多くなるのかもしれない。また、学費等の経済的負担の問題も、これに少なからず関わっているのではないかと想像される。

図表2-4 中退したときの学年

	中退したときの学年				合計		
	1年生	2年生	3年生	4年生以上	%	N	
男性	専門学校	53.1	35.9	6.3	4.7	100.0	64
	短大・高専	25.0	40.0	15.0	20.0	100.0	20
	大学	12.3	28.4	26.4	32.9	100.0	511
	大学院	33.3	61.1	2.8	2.8	100.0	36
	合計	18.1	31.5	22.7	27.7	100.0	635
女性	専門学校	53.9	40.8	5.3	0.0	100.0	76
	短大・高専	59.5	37.8	1.4	1.4	100.0	74
	大学	27.5	37.1	17.9	17.5	100.0	229
	大学院	8.3	66.7	16.7	8.3	100.0	12
	合計	38.0	39.0	12.2	10.7	100.0	392
男女計	専門学校	53.6	38.6	5.7	2.1	100.0	140
	短大・高専	52.1	38.3	4.3	5.3	100.0	94
	大学	17.0	31.1	23.8	28.1	100.0	740
	大学院	27.1	62.5	6.3	4.2	100.0	48
	合計	25.7	34.4	18.7	21.2	100.0	1,027

注：中退学年の無回答は分析から除いた。また、学校種類のその他・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。

図表2-5 中退したときの学年（大学・専攻分野別）

	中退したときの学年				合計	
	1年生	2年生	3年生	4年生以上	%	N
人文科学	17.3	29.9	21.3	31.5	100.0	127
社会科学	13.0	31.7	19.9	35.4	100.0	246
理・工・農	11.9	28.1	33.5	26.5	100.0	185
保健	26.7	40.0	17.8	15.6	100.0	45
教育	18.5	22.2	37.0	22.2	100.0	27
芸術・家政	28.9	40.0	13.3	17.8	100.0	45
その他	37.1	25.7	20.0	17.1	100.0	35
合計	16.8	30.8	23.8	28.6	100.0	710

注：学部・専攻の無回答、および中退学年の無回答は分析から除いた。

## 2. 学校時代での取り組みへの熱心度

つづいて、中退した学校時代での諸活動への取り組みへの熱心さについて見ていこう。結果は、図表2-6に示した。

この結果を見ると、全体として、学校での授業には51.6%、クラブやサークルでの活動には36.0%、友だちや恋人との付き合いには63.2%、アルバイトには55.4%、ダブルスクール・資格取得には11.3%の者が、熱心に取り組んでいたと回答している。また、概ね男性よりも女性のほうが、それら諸活動に熱心に取り組んでいた者の割合が高い。

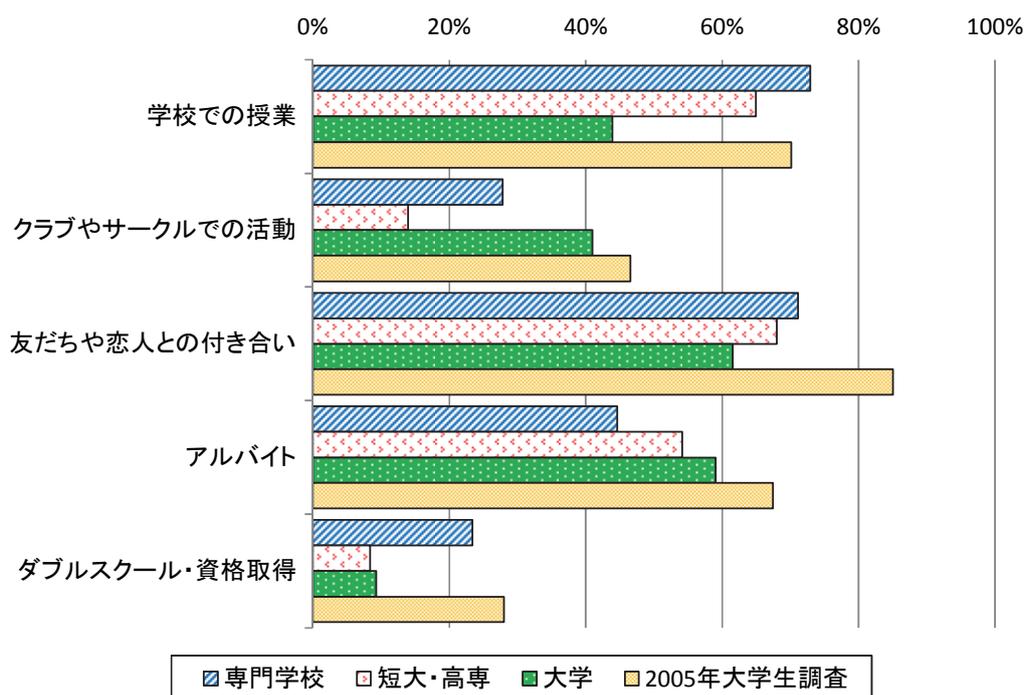
また、学歴別に見ていくと、1) 授業への熱心さは、専門・短大・高専で6割以上であるのに対して、大学では4割程度にとどまること、2) 友だちや恋人との付き合いでは、専門学校、短大・高専、大学ともに6割以上の者が熱心であったこと、3) アルバイトへの熱心さは、大学で高く、6割弱であることが、特徴的な点として挙げられる。

しかし、大学中退者について、2005年大学生調査における大学4年生の結果と比較してみると、5項目とも、中退者の熱心さが下回る結果となり、特に学校での授業、友だちや恋人との付き合いでその差が大きく見られる。中退者では、卒業生よりも、学校内外での活動、特に学業に対して消極的であった者が多く含まれることが、ここから推測される。

図表2-6 学校時代の諸活動への熱心さ（図は男女計のみ）

熱心だった(とても+まあ)の割合	学校での授業	クラブやサークルでの活動	友だちや恋人との付き合い	アルバイト	ダブルスクール・資格取得
専門学校	72.3	27.0	63.1	32.8	22.2
短大・高専	65.0	15.0	55.0	55.0	0.0
男 大学	39.2	40.5	59.2	58.2	8.5
性 大学院	83.8	27.0	64.9	27.0	13.5
合計	45.9	37.7	59.8	53.6	10.0
2005年大学生調査	61.5	48.8	80.9	61.7	19.2
専門学校	73.4	28.6	77.9	54.7	24.3
短大・高専	64.9	13.7	71.4	53.9	10.7
女 大学	54.5	42.0	66.7	61.1	11.0
性 大学院	75.0	16.7	41.7	58.3	8.3
合計	60.8	33.2	68.7	58.3	13.3
2005年大学生調査	77.9	44.6	88.7	72.7	36.0
専門学校	72.9	27.8	71.1	44.6	23.4
短大・高専	64.9	14.0	68.0	54.2	8.4
男 大学	43.9	41.0	61.5	59.1	9.3
性 大学院	81.6	24.5	59.2	34.7	12.2
合計	51.6	36.0	63.2	55.4	11.3
2005年大学生調査	70.1	46.6	85.0	67.5	28.0

注:それぞれの熱心度の無回答は分析から除いた。また、学校種類のその他・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。



### 3. 中退を決めるまでの期間

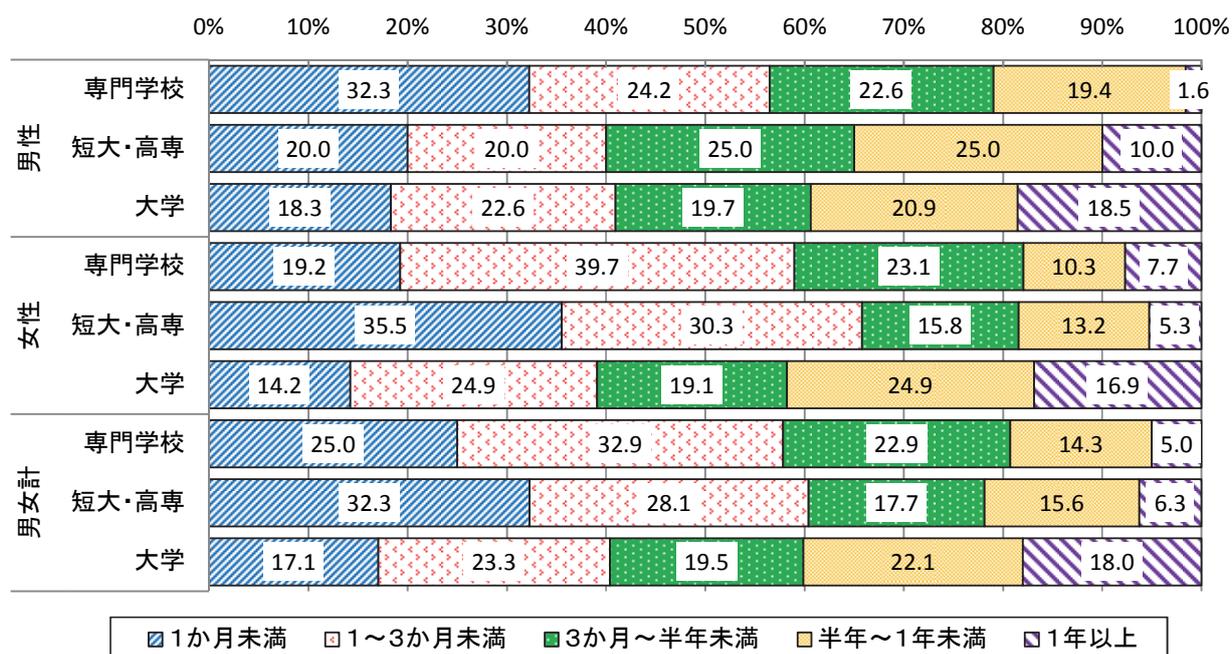
では、中退者は、どのくらいの期間をかけて中退を決めるに至っているのだろうか。中退を考え始めてから、実際に中退するまでの期間について見てみよう（図表2-7）。

この結果によると、全体の約20%が1か月未満、約25%が1～3ヶ月未満で中退することを決めており、決定まで1年以上を要する者は15%程度となっている。また、学校の種類別には、専門学校の男女、短大・高専の女性で3ヶ月未満に中退を決めた割合が半数以上となっており、比較的速やかに中退まで至っていると言える。しかし他方で、大学の男女では、中退決定までに時間を要した者の割合が高く、その4割程度が半年以上の期間がかかったと回答している。

図表 2-7 中退を考え始めてから、実際に中退するまでの期間

		中退を考え始めてから、実際に中退するまでの期間					合計	
		1か月未満	1～3か月未満	3か月～半年未満	半年～1年未満	1年以上	%	N
男性	専門学校	32.3	24.2	22.6	19.4	1.6	100.0	62
	短大・高専	20.0	20.0	25.0	25.0	10.0	100.0	20
	大学	18.3	22.6	19.7	20.9	18.5	100.0	508
	大学院	32.4	18.9	10.8	24.3	13.5	100.0	37
	合計	20.9	22.3	19.7	20.9	16.2	100.0	631
女性	専門学校	19.2	39.7	23.1	10.3	7.7	100.0	78
	短大・高専	35.5	30.3	15.8	13.2	5.3	100.0	76
	大学	14.2	24.9	19.1	24.9	16.9	100.0	225
	大学院	0.0	9.1	27.3	36.4	27.3	100.0	11
	合計	18.9	28.6	19.4	20.2	13.0	100.0	392
男女計	専門学校	25.0	32.9	22.9	14.3	5.0	100.0	140
	短大・高専	32.3	28.1	17.7	15.6	6.3	100.0	96
	大学	17.1	23.3	19.5	22.1	18.0	100.0	733
	大学院	25.0	16.7	14.6	27.1	16.7	100.0	48
	合計	20.1	24.7	19.6	20.6	15.0	100.0	1,023

注：中退までの期間の無回答は分析から除いた。また、学校種類のその他・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。



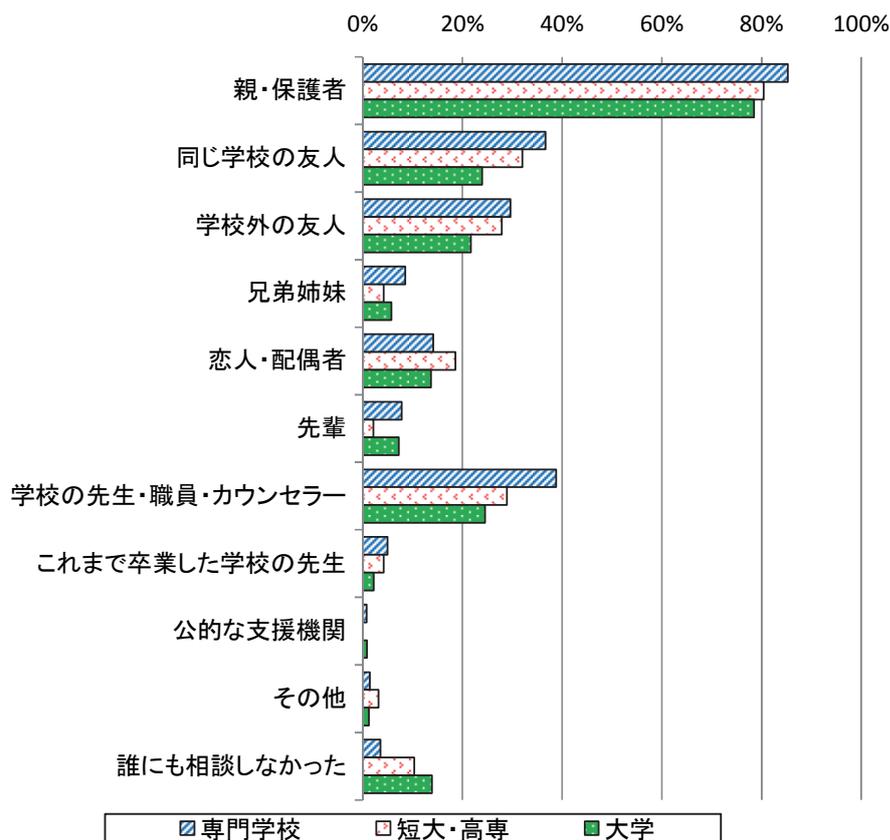
#### 4. 中退を決めるまでの相談相手

また、中退を決めるまでの相談相手（複数回答）としては、親・保護者が79.3%と最も高く、学校の先生・職員・カウンセラー（27.6%）、同じ学校の友人（26.2%）、学校外の友人（23.2%）がそれに続いている（図表2-8）。誰にも相談しなかった者は、全体の12.5%である。男女別には、女性よりも男性で誰にも相談しなかった者の割合が高い傾向にある。

図表2-8 中退を決めるまでの間に相談した相手（複数回答、図は男女計のみ）

		専門学校	短大・高専	大学	大学院	全体	2005年 大学生調査
男 性	親・保護者	78.5	75.0	78.6	64.9	77.8	70.8
	同じ学校の友人	26.2	20.0	24.1	21.6	23.9	72.6
	学校外の友人	23.1	15.0	19.8	21.6	20.0	46.9
	兄弟姉妹	3.1	5.0	4.4	5.4	4.3	19.0
	恋人・配偶者	9.2	5.0	11.0	5.4	10.2	26.1
	先輩	9.2	5.0	8.3	5.4	8.1	32.6
	学校の先生・職員・カウンセラー	33.8	25.0	22.5	35.1	24.7	34.5
	これまで卒業した学校の先生	4.6	5.0	1.5	2.7	2.0	
	公的な支援機関	0.0	0.0	0.2	5.4	0.5	2.2 ※
	その他	0.0	0.0	1.0	2.7	0.9	
	誰にも相談しなかった	4.6	25.0	15.0	27.0	14.9	9.0
合計(N)	65	20	519	37	645	8,611	
女 性	親・保護者	90.9	81.8	78.1	83.3	81.5	80.2
	同じ学校の友人	45.5	35.1	23.6	16.7	29.9	84.5
	学校外の友人	35.1	31.2	25.8	25.0	28.4	55.5
	兄弟姉妹	13.0	3.9	8.6	0.0	8.2	28.4
	恋人・配偶者	18.2	22.1	19.7	0.0	19.2	35.2
	先輩	6.5	1.3	4.7	0.0	4.2	32.4
	学校の先生・職員・カウンセラー	42.9	29.9	28.8	50.0	32.4	39.5
	これまで卒業した学校の先生	5.2	3.9	3.4	0.0	3.7	
	公的な支援機関	1.3	0.0	2.1	0.0	1.5	3.1 ※
	その他	2.6	3.9	1.7	0.0	2.2	
	誰にも相談しなかった	2.6	6.5	11.2	16.7	8.7	3.7
合計(N)	77	77	233	12	401	9,564	
男 女 計	親・保護者	85.2	80.4	78.5	69.4	79.3	75.7
	同じ学校の友人	36.6	32.0	23.9	20.4	26.2	78.9
	学校外の友人	29.6	27.8	21.7	22.4	23.2	51.4
	兄弟姉妹	8.5	4.1	5.7	4.1	5.8	24.0
	恋人・配偶者	14.1	18.6	13.7	4.1	13.7	30.9
	先輩	7.7	2.1	7.2	4.1	6.6	32.5
	学校の先生・職員・カウンセラー	38.7	28.9	24.5	38.8	27.6	37.1
	これまで卒業した学校の先生	4.9	4.1	2.1	2.0	2.7	
	公的な支援機関	0.7	0.0	0.8	4.1	0.9	2.7 ※
	その他	1.4	3.1	1.2	2.0	1.4	
	誰にも相談しなかった	3.5	10.3	13.8	24.5	12.5	6.2
合計(N)	142	97	752	49	1,046	18,175	

注：相談相手の無回答は分析から除いた。また、学校種類のその他・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。なお、2005年大学生調査は、「大学3年生のとき、卒業後の進路について誰かと話し合ったり相談したりしましたか」への回答結果。※は「その他」の相談相手（アルバイト先の人、社会人の知り合い、就職支援機関等）への回答割合。



さらに、学校の種類別に見ていくと、1) 相談者としては親・保護者が最も多く、専門学校、短大・高専、大学とも8割前後であること、2) 同じ学校の友人、学校外の友人、学校の先生・職員・カウンセラーなどを相談相手とする者の割合は、専門・短大・高専と比べて、大学中退者で低いこと、3) 誰にも相談しなかった者の割合は、専門・短大・高専と比べて、大学中退者で13.8%と高いことなどの特徴が見出される。

加えて、2005年大学生調査の結果（大学3年時での卒業後進路に関する相談相手）と比較してみると、親・保護者に相談する者の割合は両者で大差ないが、中退者では学内外の友人、兄弟姉妹など身近な相談者の割合が顕著に低く、かわって誰にも相談しなかった割合が高いことがわかる。その一方で、質問項目が異なるため直接の比較は出来ないが、これまで卒業した学校の先生や公的な支援機関などに相談した者の割合は、中退者のほうが若干高くなっている。中退者の場合、親・保護者以外では、身近に中退後の進路や求職について相談する相手を見つけることが難しい状況にあるのかもしれないことが、ここから推測される。例えば、つぎの自由回答（中退時の悩みや困難について。詳しくは付属資料を参照）にも、そうした相談相手を見つけることの難しさが見出せる。

【相談相手が居なかった事。身近な知り合いでなくカウンセラーの方などに相談していたら良かったと思います。】（女性／30歳／大学中退）

【うつ状態で何もやる気がおきず、適切な判断能力がなかったため、中退のデメリットなどを考えていなかった。相談する相手が親しかおらず、その親もどうしたらいいのかとまどったまま、中退後のフォローなど具体性がないまま決めてしまった。その場しのぎの決断となってしまった。そのため長く自宅にひきこもっていたので社会復帰に時間がかかった。】(女性/26歳/大学中退)

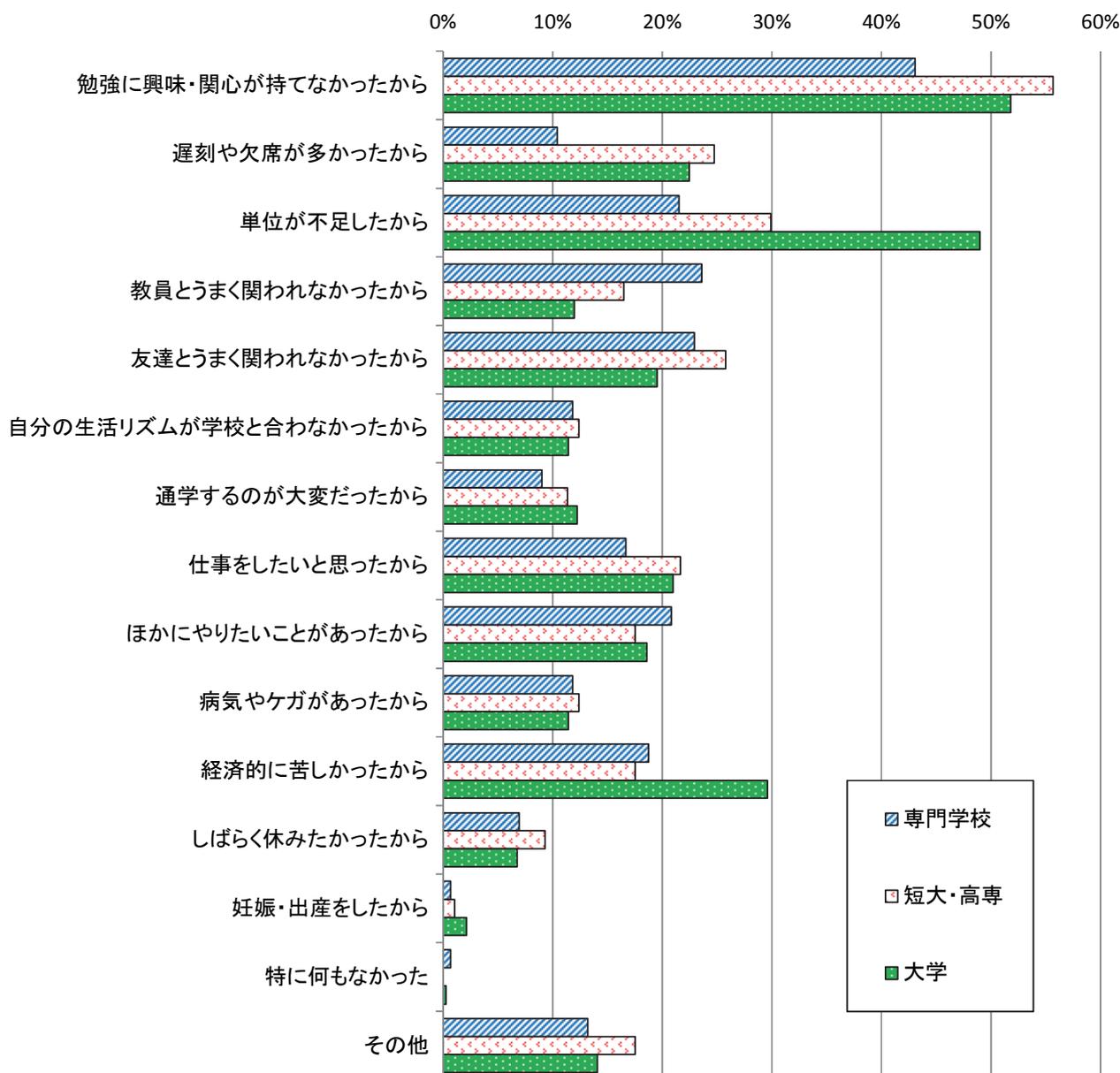
## 5. 中退理由

つづいて、中退理由（複数回答）について見ていこう（図表2-9）。まず、全体の傾向を確認すると、「勉強に興味・関心が持てなかったから」が中退理由として最も多く、全体の49.5%の者がそれを理由の1つとして挙げている。また、それ以外では、「単位が不足したから」（41.7%）、「経済的に苦しかったから」（27.3%）、「仕事をしたいと思ったから」（20.4%）、「友だちとうまく関われなかったから」（20.3%）、「遅刻や欠席が多かったから」（20.1%）などが主要な中退理由となっている。

図表2-9 中退しようと思った理由（複数回答）

	専門学校	短大・高専	大学	大学院	合計
勉強に興味・関心が持てなかったから	43.1	55.7	51.8	26.5	49.5
遅刻や欠席が多かったから	10.4	24.7	22.4	4.1	20.1
単位が不足したから	21.5	29.9	49.0	10.2	41.7
教員とうまく関われなかったから	23.6	16.5	12.0	40.8	15.3
友達とうまく関われなかったから	22.9	25.8	19.5	16.3	20.3
自分の生活リズムが学校と合わなかったから	11.8	12.4	11.4	8.2	11.3
通学するのが大変だったから	9.0	11.3	12.2	4.1	11.2
仕事をしたいと思ったから	16.7	21.6	21.0	20.4	20.4
ほかにやりたいことがあったから	20.8	17.5	18.6	14.3	18.5
病気やケガがあったから	11.8	12.4	11.4	20.4	12.1
経済的に苦しかったから	18.8	17.5	29.6	30.6	27.3
しばらく休みたかったから	6.9	9.3	6.8	6.1	7.0
妊娠・出産をしたから	0.7	1.0	2.1	0.0	1.7
特に何もなかった	0.7	0.0	0.3	0.0	0.3
その他	13.2	17.5	14.1	24.5	14.7
合計(N)	144	97	753	49	1,049

注：中退理由の無回答は分析から除いた。また、学校種類のその他・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。



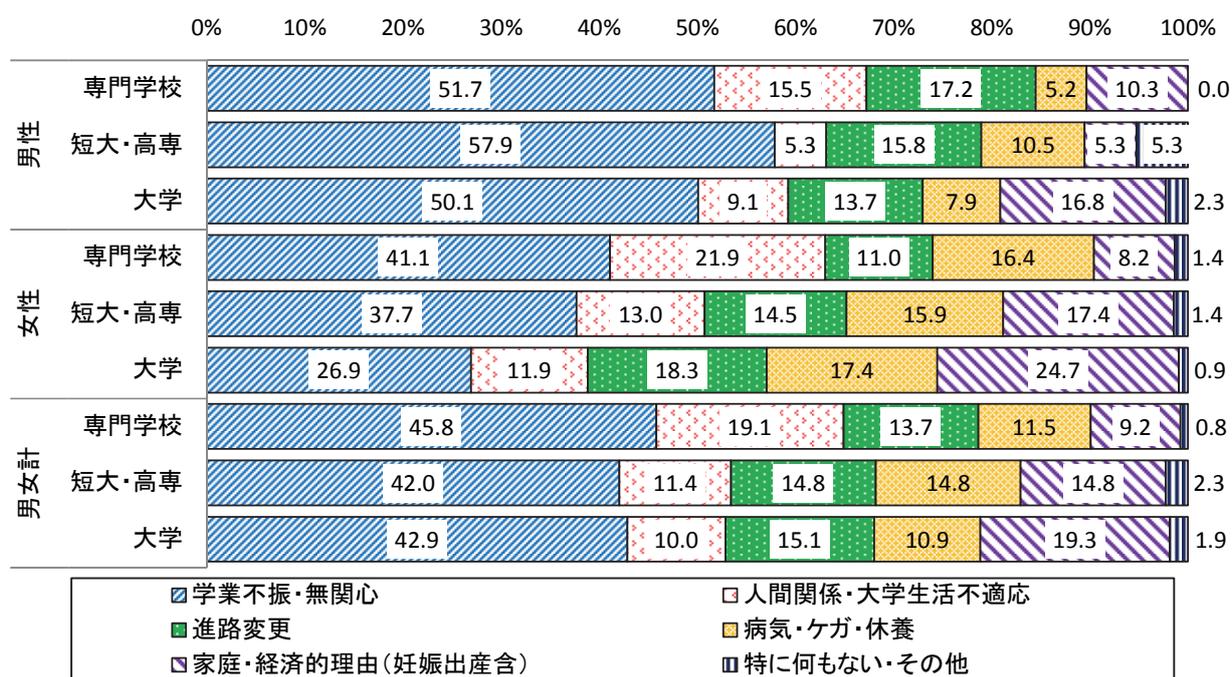
他方、学校の種類別に見ても、専門学校、短大・高専、大学ともに、「勉強に興味・関心が持てなかったから」が最も多い理由となっている。それ以外の理由に関しては、1)「単位が不足したから」・「経済的に苦しかった」が、大学中退者で他よりも高いこと、2)「教員とうまく関われなかったから」は、専門学校で他よりも高い傾向にあることなどが注目される。

では、以上のうち、最も重要であると中退者が挙げる理由は何か。つぎに最も重要な中退理由を見ていこう（図表2-10）。なお、ここでの分析では、上記の中退理由を、「その他」の記述内容も検討した上で再分類し、新たに6類型として用いている。

図表 2-10 最も重要な中退理由

		最も重要な中退理由						合計	
		学業不振・無関心	人間関係・大学生生活不適応	進路変更	病気・ケガ・休養	家庭・経済的理由(妊娠出産含)	特に何も無い・その他	%	N
男性	専門学校	51.7	15.5	17.2	5.2	10.3	0.0	100.0	58
	短大・高専	57.9	5.3	15.8	10.5	5.3	5.3	100.0	19
	大学	50.1	9.1	13.7	7.9	16.8	2.3	100.0	481
	大学院	22.9	22.9	14.3	17.1	22.9	0.0	100.0	35
	合計	48.6	10.4	14.1	8.4	16.6	2.0	100.0	597
女性	専門学校	41.1	21.9	11.0	16.4	8.2	1.4	100.0	73
	短大・高専	37.7	13.0	14.5	15.9	17.4	1.4	100.0	69
	大学	26.9	11.9	18.3	17.4	24.7	0.9	100.0	219
	大学院	45.5	9.1	18.2	18.2	0.0	9.1	100.0	11
	合計	32.2	13.9	16.1	17.2	19.3	1.3	100.0	373
男女計	専門学校	45.8	19.1	13.7	11.5	9.2	0.8	100.0	131
	短大・高専	42.0	11.4	14.8	14.8	14.8	2.3	100.0	88
	大学	42.9	10.0	15.1	10.9	19.3	1.9	100.0	700
	大学院	28.3	19.6	15.2	17.4	17.4	2.2	100.0	46
	合計	42.3	11.8	14.8	11.8	17.6	1.8	100.0	970

注: 最も重要な中退理由の無回答は分析から除いた。また、学校種類のその他・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。



その結果、最も重要な中退理由は、どの学校種でも、「学業不振・無関心」が4割前後、「人間関係・大学生生活不適応」が1～2割弱、「進路変更」が1割5分程度、「病気・ケガ・休養」が1～1割5分程度、「家庭・経済的理由」が1～2割程度であることがわかる。

ただし、男女によって違いがあり、どの学校種の男性でも「学業不振・無関心」が半数以上であることや、専門学校の女性で「人間関係・大学生生活不適応」が21.9%、大学の女性で

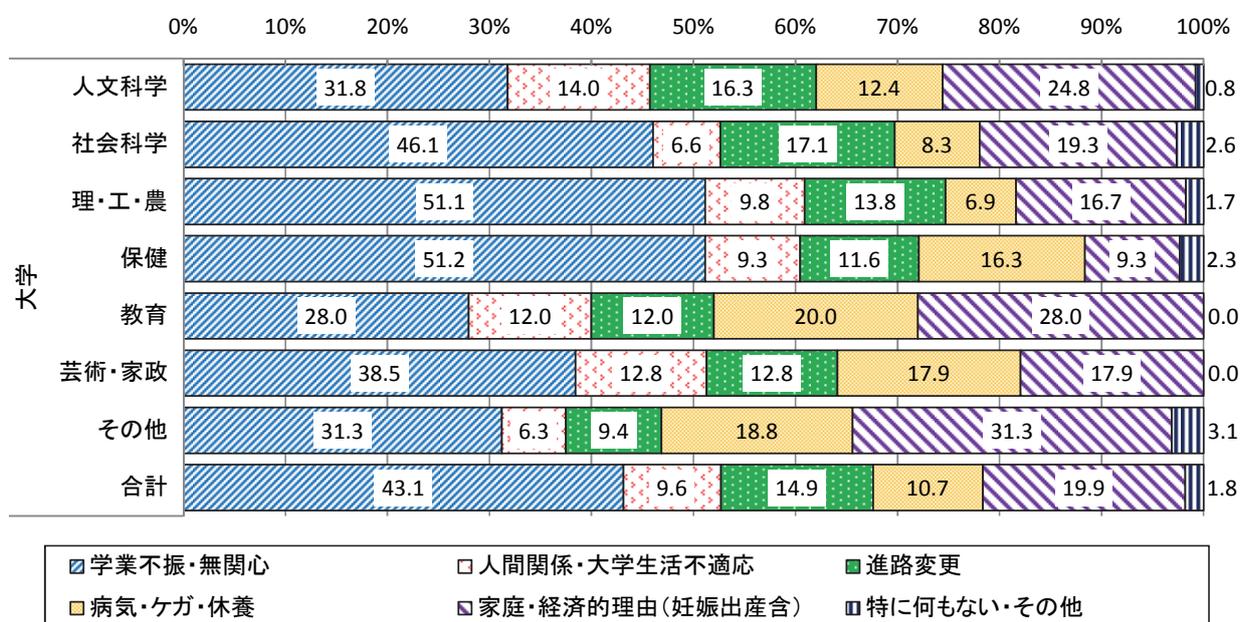
「家庭・経済的理由」が24.7%と比較的高いことなどが男女差の特徴として挙げられる。

さらに、大学・専攻分野別に、最も重要な中退理由を見ると違いが確認される（図表2-11）。具体的には、1）人文科学、教育、その他では「学業不振・無関心」が3割前後と比較的低いこと、2）人文科学、教育、芸術・家政では「人間関係・大学生活不適應」が1割を超えること、3）「進路変更」は人文・社会科学で15%以上と高いこと、4）「家庭・経済的理由」は教育、人文科学、その他で2割以上であることなどが、分野別の特徴として挙げられる。

図表2-11 最も重要な中退理由（大学・専攻分野別）

	最も重要な中退理由						合計	
	学業不振・無関心	人間関係・大学生活不適應	進路変更	病気・ケガ・休養	家庭・経済的理由(妊娠出産含)	特に何も無い・その他	%	N
人文科学	31.8	14.0	16.3	12.4	24.8	0.8	100.0	129
社会科学	46.1	6.6	17.1	8.3	19.3	2.6	100.0	228
理・工・農	51.1	9.8	13.8	6.9	16.7	1.7	100.0	174
大 保健	51.2	9.3	11.6	16.3	9.3	2.3	100.0	43
学 教育	28.0	12.0	12.0	20.0	28.0	0.0	100.0	25
芸術・家政	38.5	12.8	12.8	17.9	17.9	0.0	100.0	39
その他	31.3	6.3	9.4	18.8	31.3	3.1	100.0	32
合計	43.1	9.6	14.9	10.7	19.9	1.8	100.0	670

注：学部・専攻の無回答、および最も重要な中退理由の無回答は分析から除いた。



なお、本調査以外に、大学等中退者の中退理由の把握等を試みた調査として、大学、短大、高専を対象に実施された文部科学省による調査（以下、文科省調査）がある。同調査におけ

る中退理由の内訳は、参考図表 2-2 に示している<sup>5</sup>。その結果を見ると、中退理由として、「その他」の理由（22.6%）を除いて、「経済的理由」が 21.6%と最も高く、「転学」（16.8%）、「学業不振」（15.6%）がそれに続いている。

また、文科省調査と今回のハローワーク調査（短大・高専・大学）を比較すると、今回の調査では、学業面や学校生活不適應、病気・けが等に関わる理由の割合が大きく、進路変更の割合が小さいことがわかる。経済的理由に関しては、ハローワーク調査で数ポイント低い割合となっている。

参考図表 2-2 文科省調査による平成 24 年度中退者（学部生）の中退理由の内訳

	学部生(短大・高専含む)				
	国立	公立	私立	高専	合計
学業不振	18.6	12.2	15.0	33.6	15.6
学校生活不適應	1.9	3.8	5.1	4.8	4.8
就職	10.9	13.4	12.2	7.9	12.1
転学	18.4	19.4	16.1	36.2	16.8
海外留学	0.3	0.8	0.7	0.2	0.7
病気・けが・死亡	6.4	6.9	5.8	2.7	5.8
経済的理由	13.7	10.9	23.1	1.0	21.6
その他	29.8	32.5	21.9	13.6	22.6
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
(上段:%, 下段:N)	5,465	1,816	61,681	1,405	70,367

注: (報道発表) 文部科学省(2014)「学生の中途退学や休学等の状況について」より作成。

一方、専門学校（専修学校）に関しては、平成 25 年度文部科学省委託事業「専修学校における生徒・学生支援等に対する基礎調査」（以下、専修学校調査）が専修学校生の中退理由を検討している。その結果は、参考図表 2-3 に掲載している。この調査によると、専門学校を中退する理由として最も多いのが「学業不振」（19.1%）であり、「進路変更（その他）」（15.7%）と「進路変更（就職）」（14.9%）がそれに続く。「経済的理由」による中退は 11.0% となっている。

この結果を今回のハローワーク調査（専門学校）と比較すると、今回調査では、病気・けがや経済的理由に関しては同程度であるが、学業面や学校生活不適應に関わる理由の割合は大きく、進路変更の割合は小さくなっていることがわかる。

<sup>5</sup> なお、文科省調査では、大学院の修士・博士課程についても対象となっている。しかし、本稿では、上述のように、大学院中退者についてはあくまで参考値のため、参考図表 2-2 の作成において、対象を学部生（短大・高専含む）に限定している。

参考図表 2-3 専修学校調査による中退理由の内訳

	平成24年度末				合計	割合
	専門課程 (公立)	専門課程 (私立)	一般課程 (公立)	一般課程 (私立)	N	%
学業不振	131	5,696	0	14	5,841	19.1
学校生活不適応	111	3,747	1	50	3,909	12.8
進路変更(就職)	135	4,402	0	17	4,554	14.9
進路変更(転学)	47	1,791	0	25	1,863	6.1
進路変更(その他)	271	4,452	3	71	4,797	15.7
病気・けが・死亡	98	3,443	0	36	3,577	11.7
経済的理由	35	3,273	0	27	3,335	11.0
海外留学	1	70	0	1	72	0.3
その他	66	2,553	1	25	2,645	8.7
合計	895	29,427	5	266	30,593	100

注:小林・圓入(2014, p.13)の図表O-2をもとに作成。

もちろん調査対象・方法等に違いがあるため、比較した結果の解釈には慎重である必要があるが、これらの結果を踏まえると、中退者全体のうちでも、進学・就職などの進路が未定のまま、あるいは将来展望が不明確なまま中退した者が、ハローワークを利用する中退者には多く含まれている可能性が考えられる。

## 6. 大学等入学以前の進路意識

以上のように今回のハローワーク調査では、中退理由のうち、「学業不振・無関心」が高い割合を占めるが、それは大学進学時の進路意識と何らかの関連性があるのだろうか。以下では、まず中退者の大学等入学以前の進路意識の分布を確認し、つづいて進路意識と中退理由との関係性を見ていこう。

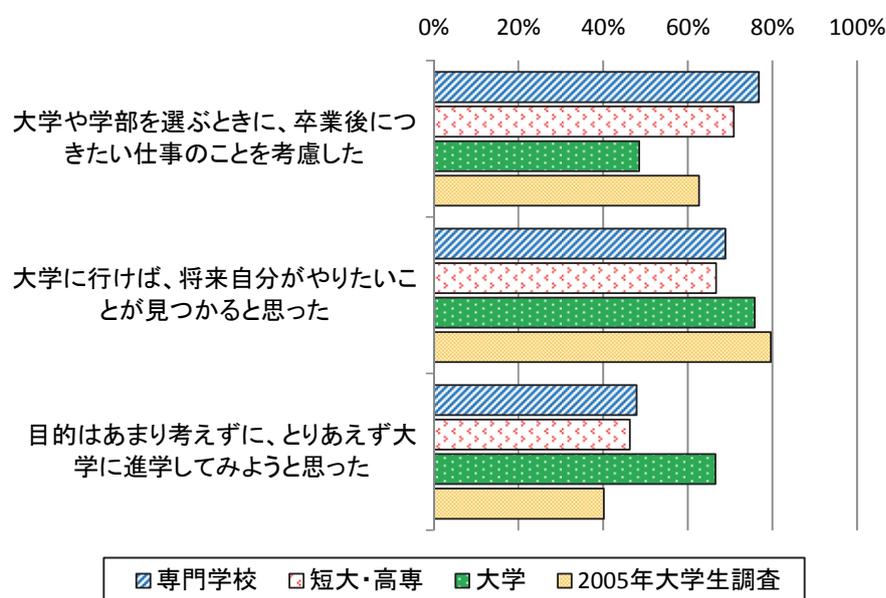
まず、大学等進学選択時の進路意識について見てみると(図表2-12)、全体うち、「大学や学部を選ぶときに、卒業後につきたい仕事のことを考慮した」者は54.5%、「大学に行けば、将来自分がやりたいことが見つかると思った」者は73.8%、「目的はあまり考えずに、とりあえず大学に進学してみようと思った」者は61.3%となっている。2005年大学生調査の結果と合わせて見ると、在学生と比較して、大学等中退者では「目的はあまり考えずに、とりあえず大学に進学してみようと思った」者の割合が、男女ともに顕著に高い結果であることがわかる。

また、これを学校の種類別に見ていくと、1) 進路選択時に将来の仕事のことを考慮した者は、専門学校、短大・高専(ただし女性のみ)では7割を超えるが、大学の特に男性では4割半ばと低いこと、2) 目的はあまり考えず、進学した者は、専門学校、短大・高専で半数以下であるが、大学の特に男性で7割以上と高いことが指摘できる。

図表 2-12 大学等進学選択時の進路意識（図は男女計のみ）

あてはまる(かなり+ある程度)の割合	大学や学部を選ぶときに、卒業後に付きたい仕事のことを考慮した	大学に行けば、将来自分が見つかると思った	目的はあまり考えずに、とりあえず大学に進学してみようと思った
専門学校	74.6	65.0	54.8
短大・高専	57.9	73.7	47.4
男 大学	44.6	75.7	71.6
性 大学院	48.6	78.4	54.1
合計	48.2	74.8	67.8
2005年大学生調査	58.6	79.3	45.8
専門学校	78.5	71.8	42.3
短大・高専	74.0	64.9	46.1
女 大学	57.1	76.0	55.2
性 大学院	50.0	50.0	58.3
合計	64.5	72.4	51.0
2005年大学生調査	66.1	79.8	35.0
専門学校	76.8	68.8	47.9
短大・高専	70.8	66.7	46.3
男 大学	48.5	75.8	66.5
女 大学院	49.0	71.4	55.1
計 合計	54.5	73.8	61.3
2005年大学生調査	62.6	79.5	40.1

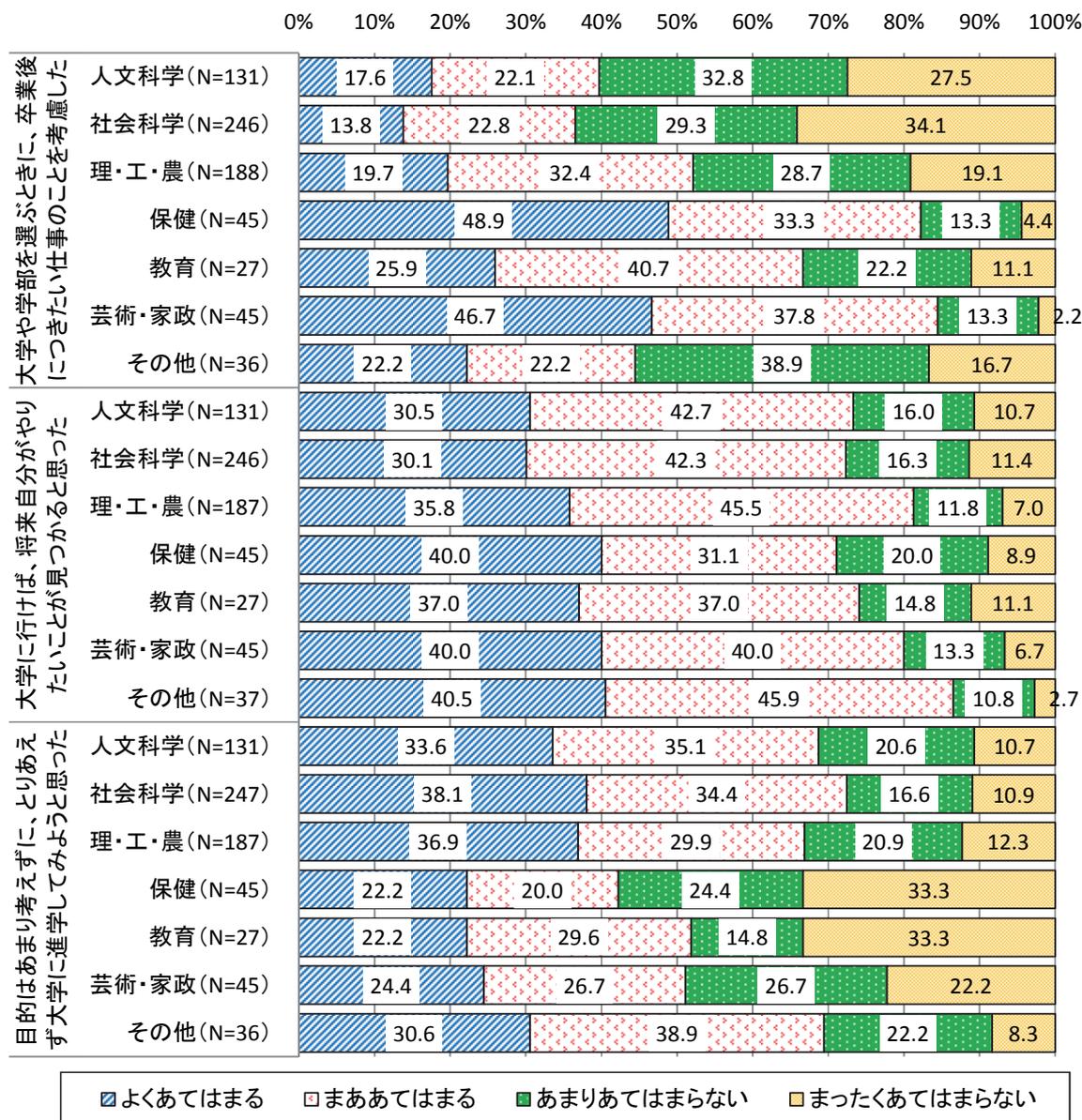
注:それぞれの進路意識の無回答は分析から除いた。また、学校種類のその他・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。



さらに、大学について専攻分野別に見てみると（図表 2-13）、1）進路選択時に将来の仕事を考慮した者は、人文・社会科学、理・工・農、その他で低く、保健、教育、芸術・家政では比較的高いこと、2）目的はあまり考えず、進学した者は、それとは反対に、人文社会科学、理・工・農、その他で高く、保健、教育、芸術・家政では低いことが傾向として読み

取れる。

図表 2-13 大学進学選択時の進路意識（大学・専攻分野別）



それでは、以上見てきた大学等入学以前での進路意識と中退をしようと思った理由には何か関連が見られるのだろうか。ここでは、大学中退者に限定し、中退理由ごとに、進学選択時の進路意識の高低を確認しよう。その結果を示したのが、図表 2-14 である。

この結果を見ると、特に「目的はあまり考えずに、とりあえず大学に進学してみようと思った」で、中退理由による顕著な違いがあることがわかる。具体的には、学業不振・無関心や人間関係・大学生活不適応、進路変更を中退理由とする者で、目的意識がはっきりとしないまま進学した者が多く、なかでも、学業不振・無関心による中退者の7割以上がとりあえ

ず大学に進学していることは注目に値する。他方、病気・ケガ・休養や家庭・経済的理由による中退者では、比較的目的を持って進学したが退学することになった者が多い傾向が見られる。

図表 2-14 大学等進学選択時の進路意識（中退理由別、大学中退者のみ）

	大学や学部を選ぶときに、卒業後に就きたい仕事のことを考慮した				大学に行けば、将来自分がやりたいことが見つかると思った				目的はあまり考えずに、とりあえず大学に進学してみようと思った			
	あてはまる	あてはまらない	%	N	あてはまる	あてはまらない	%	N	あてはまる	あてはまらない	%	N
学業不振・無関心	44.0	56.0	100.0	309	79.5	20.5	100.0	309	74.5	25.5	100.0	309
人間関係・大学生活不適應	51.4	48.6	100.0	70	75.7	24.3	100.0	70	67.1	32.9	100.0	70
進路変更	38.7	61.3	100.0	103	72.6	27.4	100.0	103	66.7	33.3	100.0	102
病気・ケガ・休養	60.5	39.5	100.0	76	80.3	19.7	100.0	76	59.2	40.8	100.0	76
家庭・経済的理由（妊娠・出産含）	56.8	43.2	100.0	132	75.9	24.1	100.0	133	56.5	43.5	100.0	131
特に何もない・その他	23.1	76.9	100.0	9	61.5	38.5	100.0	9	38.5	61.5	100.0	9
合計	47.8	52.2	100.0	699	77.1	22.9	100.0	700	66.9	33.1	100.0	697

注：大学中退者に限った分析結果。最も重要な中退理由の無回答、およびそれぞれの進路意識の無回答は分析から除いた。

### 第3節 中退後の生活状況と意識

以上、第2節では、中退までの学校生活や中退理由などについて検討してきた。では、中退者は、中退した後の現在どのような生活をしており、これまでの生活に関してどのように考えているのだろうか。最後に、本節では、大学等中退者の現在の生活状況、および生活諸面に関わる意識について検討していこう。また、中退後の生活・意識に関連して、彼らが中退前後にどのような悩みや困難を経験していたのかについても、自由記述の分析をもとに見ていくことにする。なお、中退後の就職活動については、次章で検討しているので、そちらを参照されたい。

#### 1. 現在の居住状況、結婚の有無、生計維持

まず、現在の生活状況として、現在一人暮らしか否か、結婚しているか否か、自らの収入によって生活しているか否かについて見ていくと（図表2-15）、全体のうち、14.0%が現在一人暮らし、8.8%が既婚であり、34.2%の者がおもに自分自身の収入で生活していることがわかる。男女による違いは、それほど大きく見られない。

また、学校の種類別にこれらの状況を見てみると、1) 現在ひとり暮らしの者は、大学中退者で多少高いが、全体としては1割5分以下であること、2) 現在結婚している者は、対象者の多くが20代であるため総じて少なく、結婚者の割合が高い大学・女性でも1割程度であること、3) 現在、おもに自分の収入によって生活している者は、全体の3分の1程度であるが、その割合は専門学校よりも短大・高専、大学で高いことが指摘できる。

図表 2-15 現在の居住状況、結婚の有無、生計維持

	現在、一人暮らしか否か				現在、結婚しているか否か				現在、おもに自分自身の収入によって生活しているか否か				
	ひとり	ひとりではない	合計(%、N)		結婚している	結婚していない	合計(%、N)		あなた自身	あなた以外の家族	合計(%、N)		
男性	専門学校	9.2	90.8	100.0	65	6.3	93.8	100.0	64	21.9	78.1	100.0	64
	短大・高専	5.0	95.0	100.0	20	5.0	95.0	100.0	20	30.0	70.0	100.0	20
	大学	15.1	84.9	100.0	518	8.8	91.2	100.0	521	39.1	60.9	100.0	516
	大学院	27.0	73.0	100.0	37	2.7	97.3	100.0	37	27.0	73.0	100.0	37
	合計	14.5	85.5	100.0	668	8.1	91.9	100.0	670	35.5	64.5	100.0	665
女性	専門学校	12.7	87.3	100.0	79	3.8	96.2	100.0	79	19.0	81.0	100.0	79
	短大・高専	7.9	92.1	100.0	76	10.4	89.6	100.0	77	30.7	69.3	100.0	75
	大学	14.2	85.8	100.0	233	11.6	88.4	100.0	233	36.6	63.4	100.0	232
	大学院	25.0	75.0	100.0	12	8.3	91.7	100.0	12	25.0	75.0	100.0	12
	合計	13.2	86.8	100.0	416	10.1	89.9	100.0	417	32.1	67.9	100.0	414
男女計	専門学校	11.1	88.9	100.0	144	4.9	95.1	100.0	143	20.3	79.7	100.0	143
	短大・高専	7.3	92.7	100.0	96	9.3	90.7	100.0	97	30.5	69.5	100.0	95
計	大学	14.8	85.2	100.0	751	9.7	90.3	100.0	754	38.4	61.6	100.0	748
	大学院	26.5	73.5	100.0	49	4.1	95.9	100.0	49	26.5	73.5	100.0	49
合計	14.0	86.0	100.0	1,084	8.8	91.2	100.0	1,087	34.2	65.8	100.0	1,079	

注：それぞれの項目（居住状況、結婚の有無、生計維持）の無回答は分析から除いた。また、学校種類のその他・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。

加えて、居住状況に関して、中退した学校時代と現在の居住状況の関係を見たところ（図表 2-16）、中退時にアパートなどで一人暮らしであった者のうち、2割程度は継続してひとり暮らしをしているが、大多数は中退後に一人暮らしから両親・兄弟姉妹との同居にかわっていることがわかる。中退後の就労状況とも関係して、独力で生計を立てることが難しく、家族と同居するに至っている者が、中退者には多く見られるのではないかと推測される。

図表 2-16 中退した学校時代と現在の居住状況との関係

	現在、一人暮らしか否か		合計		現在、両親・兄弟姉妹と同居か否か		合計	
	ひとり	ひとりではない	%	N	同居している	同居していない	%	N
	中退した学校時代の居住状況							
実家	8.6	91.4	100.0	338	81.7	18.3	100.0	338
アパートなど	23.1	76.9	100.0	247	66.0	34.0	100.0	247
男 (一人暮らし)	17.8	82.2	100.0	45	68.9	31.1	100.0	45
性 学生寮など	16.7	83.3	100.0	12	83.3	16.7	100.0	12
その他	15.0	85.0	100.0	642	74.8	25.2	100.0	642
合計	5.2	94.8	100.0	233	77.3	22.7	100.0	233
実家	24.6	75.4	100.0	138	61.6	38.4	100.0	138
女 (一人暮らし)	21.7	78.3	100.0	23	69.6	30.4	100.0	23
性 学生寮など	14.3	85.7	100.0	7	71.4	28.6	100.0	7
その他	13.0	87.0	100.0	401	71.3	28.7	100.0	401
合計	7.2	92.8	100.0	571	79.9	20.1	100.0	571
実家	23.6	76.4	100.0	385	64.4	35.6	100.0	385
男 (一人暮らし)	19.1	80.9	100.0	68	69.1	30.9	100.0	68
男女計 学生寮など	15.8	84.2	100.0	19	78.9	21.1	100.0	19
その他	14.2	85.8	100.0	1,043	73.4	26.6	100.0	1,043
合計								

注: 中退した学校時代および現在の居住形態の無回答は分析から除いた。

## 2. 生活諸面に関わる意識

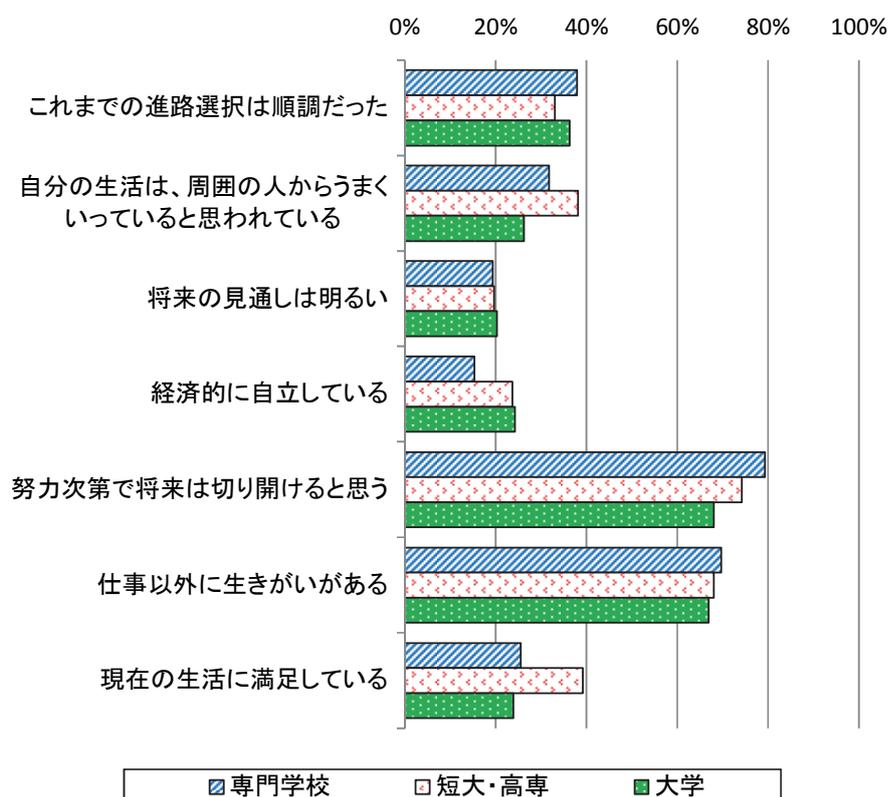
つぎに、現在の生活意識について見ると（図表 2-17）、全体のうち、70.8%の者が「努力次第で将来は切り開ける」と考えており、67.7%の者が「仕事以外に生きがいがある」と回答している。これら2項目については、男性よりも女性で高い傾向にあり、またどの学校種でもそれぞれ6割を超えている。

しかし、その一方で、全体のうち、以下の項目に肯定的な回答をした者は、「自分の生活は周囲の人からうまくいっていると思われる」で 28.2%、「将来の見通しは明るい」で 20.8%、「経済的に自立している」で 22.9%、「現在の生活に満足している」では 25.1%と、3割以下のかかなり低い割合となっている。それらどの項目でも、男性の肯定的回答の割合が女性に比べて低い傾向にある。

図表 2-17 生活諸面に関わる意識（図は男女計のみ）

	あてはまる(かなり+ある程度)の割合	これまでの進路選択は順調だった	自分の生活は、周囲の人からうまくいっていると思われる	将来の見通しは明るい	経済的に自立している	努力次第で将来は切り開けると思う	仕事以外に生きがいがある	現在の生活に満足している
男性	専門学校	26.2	21.5	10.8	13.8	72.3	70.8	23.1
	短大・高専	10.0	10.0	5.0	15.0	65.0	60.0	25.0
	大学	34.4	21.3	16.4	24.2	66.0	65.3	20.5
	大学院	56.8	18.9	27.0	21.6	78.4	75.7	16.2
	合計	34.3	21.3	16.1	22.5	67.7	66.4	20.4
女性	専門学校	46.8	39.2	25.3	15.4	84.8	68.4	26.6
	短大・高専	39.0	45.5	23.4	26.0	76.6	70.1	42.9
	大学	41.2	37.7	29.2	24.2	72.1	71.1	31.3
	大学院	58.3	50.0	58.3	33.3	66.7	58.3	33.3
	合計	42.0	39.4	28.3	23.2	75.5	70.0	32.4
男女計	専門学校	37.9	31.7	19.3	15.3	79.3	69.7	25.5
	短大・高専	33.0	38.1	19.6	23.7	74.2	68.0	39.2
	大学	36.3	26.2	20.3	24.2	68.0	66.9	23.9
	大学院	57.1	26.5	34.7	24.5	75.5	71.4	20.4
	合計	37.2	28.2	20.8	22.9	70.8	67.7	25.1

注：それぞれの意識項目の無回答は分析から除いた。また、学校種類のその他・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。



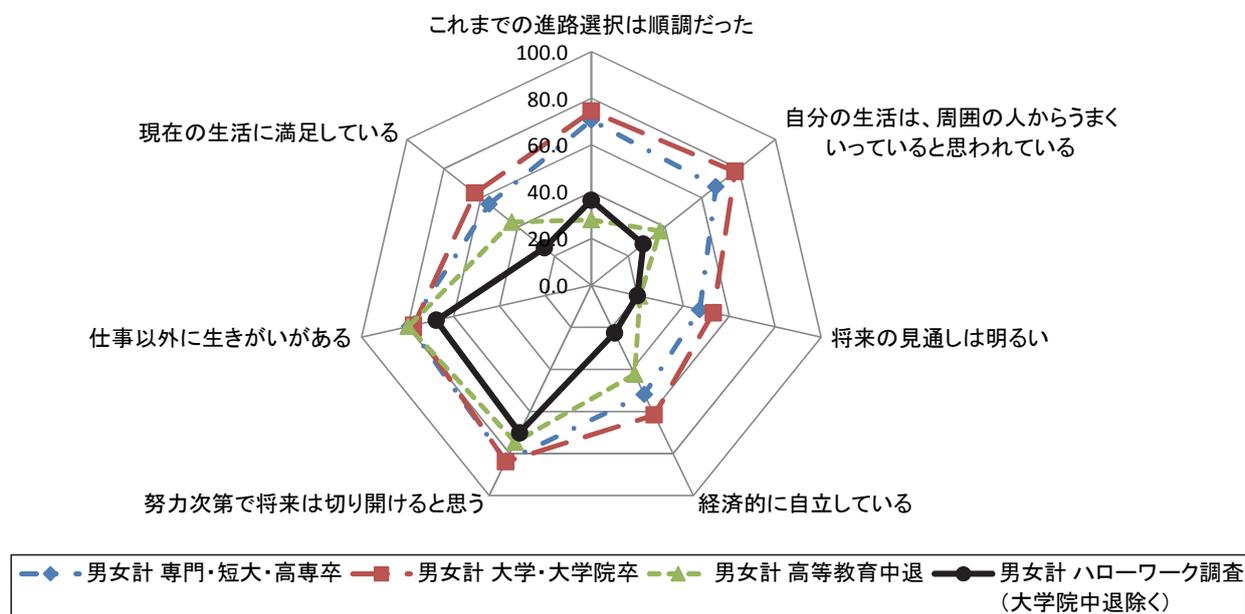
また、こうした生活諸面に関わる肯定的回答の少なさは、ワークスタイル調査と比較してみるとさらに明らかであり（図表 2-18）、ワークスタイル調査の高等教育卒業者とハローワーク調査の中退者とは肯定的度合が大きく異なることがわかる。さらに、「経済的に自立している」「現在の生活に満足している」に関しては、ワークスタイル調査の高等教育中退者と比較しても、ハローワーク調査の中退者（大学院中退除く）のほうが、顕著に低い値になっ

ている。今回対象となったハローワークを利用する中退者の場合、中退という経験に加えて、経済的な安定性を欠いていることで、現在の生活に満足できない状況に置かれているのではないかと推察される。

図表 2-18 東京都 20 代の生活意識（ワークスタイル調査より作成。図は男女計のみ）

あてはまる(かなり+ある程度)の割合	これまでの進路選択は順調だった	自分の生活は、周囲の人からうまくいっていると思われる	将来の見通しは明るい	経済的に自立している	努力次第で将来は切り開けると思う	仕事以外に生きがいがある	現在の生活に満足している
男性	専門・短大・高専卒	66.1	54.9	39.1	50.6	82.4	48.9
	大学・大学院卒	72.7	73.7	50.0	63.2	85.5	61.3
	高等教育中退	28.8	35.6	21.9	41.1	76.7	43.8
	ハローワーク調査(大学院中退除く)	32.7	21.0	15.4	22.8	66.7	20.9
女性	専門・短大・高専卒	73.5	75.9	52.5	52.7	84.3	59.8
	大学・大学院卒	76.2	82.5	56.4	60.1	82.2	65.1
	高等教育中退	26.7	40.0	20.0	44.4	71.1	42.2
	ハローワーク調査(大学院中退除く)	41.9	39.5	27.2	22.8	75.6	32.6
男女計	専門・短大・高専卒	70.6	67.6	47.2	51.9	83.6	55.5
	大学・大学院卒	74.4	78.0	53.1	61.7	83.9	63.2
	高等教育中退	28.0	37.3	21.2	42.4	74.6	43.2
計	ハローワーク調査(大学院中退除く)	36.3	28.2	20.0	22.8	70.2	25.5

注：それぞれの意識項目の無回答は、分析から除いた。なお、「高等教育中退」は大学院中退を含まない値。ハローワーク調査(大学院中退除く)の値は、今回調査をもとに算出した。



### 3. 中退時に抱いた悩みや困難

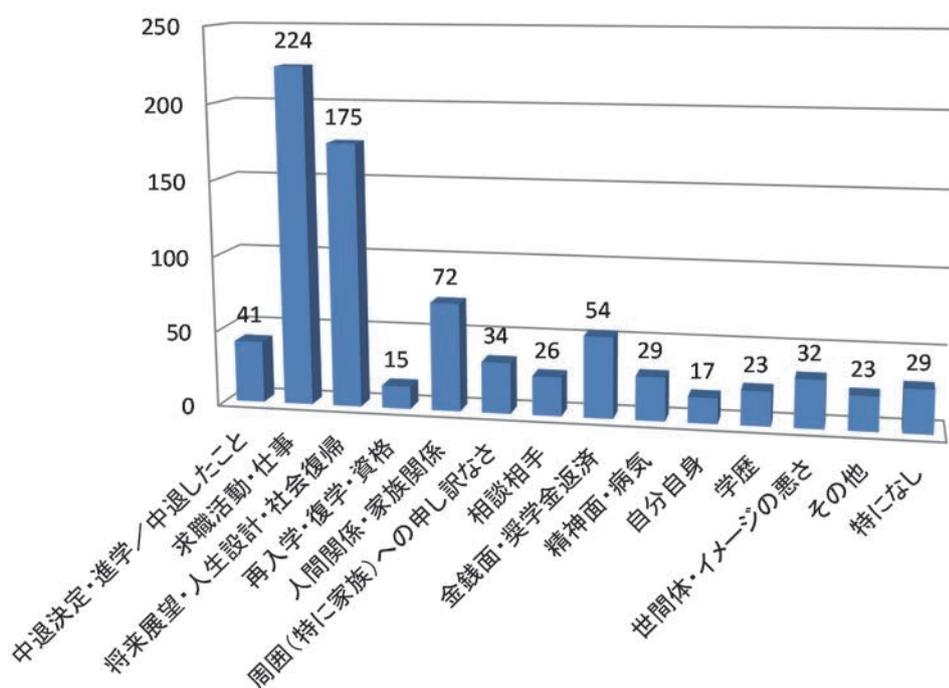
では、最後に、中退時にどのような悩み・困難があったか（「問 17 中退したときに、悩んだことや困ったことはありましたか。具体的にご記入ください」）に対する自由回答をも

とに、彼らが中退前後にどのような悩みを抱き、困難を経験していたのかを見ていこう。上記の質問に対する有効回答数は、621名（全回答者の56.7%）である。

それらの記述をコーディングした結果、回答内容は以下のように分類された。なお、1つの記述に複数のテーマが出現する場合は、それぞれのコードについてカウントした。

テーマ別コメント数を見てみると（図表2-19）、「求職活動・仕事」（224件）に関する悩み・困難が最も多く、「将来展望・人生設計・社会復帰」（175件）、「人間関係・家族関係」（72件）、「金銭面・奨学金返済」（54件）がそれに続いている。

図表2-19 中退時の悩み・困難（N=621、複数回答扱い）



具体的な記述内容はその一部を付属資料として巻末に掲載しているが、主要なテーマに関しては、ここでどのような記述があったか、数例紹介する。頻出テーマである①「求職活動・仕事」、②「将来展望・人生設計・社会復帰」、③「人間関係・家族関係」、④「金銭面・奨学金返済」には、以下のような悩みや困難が多く記されていた。

①「求職活動・仕事」（224件）

【大学における就活などの流れから完全にはみだしたので不安が大きかった。当時は安定した職に就きたいという思いしかなく、今思うと職や今後のキャリアの重ね方など、様々な方法を知っておくべきだったと思います。】（男性/25歳/大学中退）

【正直すごく焦りました。学生ではなくなってしまうし、年齢的なものもあって、早く正社員にならないと！と空回りしてしまったので、不安をやわらげるようなセミナーを受けたかった。】

(女性／21 歳／大学中退)

②「将来展望・人生設計・社会復帰」(175 件)

【今後の進路について、自分がこれからどうしていけばいいのか考えがつかなかった。単位不足の為中退後の目的もなしに中退してしまった為、本当は大学も続けて卒業したかった。明日に恐怖を感じるようになり、中退した後悔をなかなか受け止められなかった。】(男性／22 歳／大学中退)

【自分の将来について悩みました。中退は本来なら望んではいませんでしたが、しかし中退せざるを得なくなり、非常に苦しみました。大学の補助金・奨学金の充実を求めます。】(男性／20 歳／大学中退)

【中退した後、進むべき道が分からなくしばらく迷っていた時期がありました。中退したあとの人がどういう道を進んでいるのか、例などがあればもっと知りたかったです。】(女性／20 歳／大学中退)

③「人間関係・家族関係」(72 件)

【周囲からの目が厳しくなったこと。「中退＝悪いこと」という目で見られるため、友人の接し方も少し変わった気がする。】(女性／22 歳／大学中退)

【推薦で入学させてもらったにも関わらず、入学後すぐに退学してしまったので、母校への罪悪感と、親不幸の罪悪感がつらかった。】(女性／33 歳／大学中退)

【家族や親族の理解を得られず孤立、精神的に追い詰められた。順調な友人に会うのが恐ろしくなり引きこもりがちになった。周囲の目を過度に気にするようになった。】(男性／32 歳／大学中退)

④「金銭面・奨学金返済」(54 件)

【奨学金返済で困った。】(男性／22 歳／大学中退)

【これからどうやって親にお金を返していくか、どうすればお金を稼げるか。】(女性／18 歳／大学中退)

中退したことを周囲に相談しづらく、また十分な支援等を受ける機会を見つけられないまま、中退後の進路や将来設計について思い悩む大学等中退者の姿が、これらの記述から想像される。もちろん中退理由や中退時の周囲との関係性などによって、中退者が抱える悩みや困難さには幅があると考えられる。しかし、彼らが中退したがゆえに経験する悩みや困難さに関しては、それを軽減するために必要な支援・施策の充実が求められていると言えるだろう。

#### 第4節 まとめ

以上、本章では、ハローワークを利用する中退者の実態について、1) 中退した学校での生活と中退理由、2) 現在の生活状況と意識の面から検討してきた。本章の分析から見出されたおもな知見は、以下のとおりである。

##### 1) 中退した学校での生活と中退理由について

- ① 分析対象者のうち、約7割が大学中退者、約6割が男性である。また、学校の種類ごとに中退した学校での専攻分野を見ると、専門学校では医療・保健・衛生(51.1%)、短大・高専では教育・福祉(29.2%)、大学では社会科学(34.6%)が最も多くなっている。ただし、平成26年度学校基本調査の関係学科別学生比率と比較したところ、これらの専攻分野で必ずしも中退者が生み出されやすいという訳ではない。中退時の学年については、専門・短大・高専では1年生が5割以上、大学では2年生と4年生がともに3割前後と高い。
- ② 中退した学校時代に、学校での授業、友だちや恋人との付き合い、アルバイトに熱心に取り組んでいた者は全体の5割以上であり、クラブやサークルでの活動についても4割弱となっている。ただし、JILPTによる大学生調査と比較すると、中退者のほうが、どの活動でも熱心であった者の割合が低い。
- ③ 全体の4割以上が中退を考え始めてから、3ヶ月未満で実際に中退するに至っており、1年以上の期間を要した者は15%程度であった。また、大学中退者で、中退決定までの期間が長くなる傾向があり、中退を決めるまで半年以上が約4割となっている。
- ④ 中退を決めるまでの相談相手(M.A.)としては、親・保護者が79.3%と最も高く、学校の教職員・カウンセラーや学校内外の友人が2割台でそれに続いている。また、誰にも相談しなかった者は全体の12.5%で、大学中退者でその割合は高い。ただし、JILPTによる大学生調査(大学3年時での卒業後進路の相談相手)と比較すると、中退者のほうが、身近な人に相談した者の割合が低く、かわってこれまで卒業した学校の先生や公的機関などに相談した者の割合が若干高い傾向が見られた。
- ⑤ 中退理由(M.A.)を見ると、「勉強に興味・関心が持てなかったから」が49.5%と最も高く、「経済的に苦しかったから」は3割弱となっている。また、最も重要な中退理由としては、「学業不振・無関心」を挙げる者が4割以上と高く、「家庭・経済的理由(妊娠・出産含む)」と「進路変更」が15%前後でそれに続いている。「家庭・経済的理由」は、大学中退者の女性で4分の1程度と高い。
- ⑥ 大学等入学以前の進路意識を見ると、「大学や学部を選ぶときに、卒業後につきたい仕事のことを考慮した」者は54.5%、「大学に行けば、将来自分がやりたいことが見つかると思った」者は73.8%、「目的はあまり考えずに、とりあえず大学に進学してみようと思った」者は61.3%であった。特に大学中退者の男性でとりあえず進学した者の割合が約7割と高い。また、進路意識と中退理由には関係が見られ、「学業不振・無関心」で大学を中

退した者の7割以上が目的を持たずに進学した層であることが確認された。

## 2) 中退後の生活状況と意識について

- ① 現在の生活状況について見ると、全体の14.0%が一人暮らしで、8.8%が既婚者であった。また、現在、おもに自分自身の収入で生活している者は全体の約3分の1であったが、専門学校中退者でその割合が短大・高専、大学と比べて低い。
- ② 生活諸面に関わる意識について見ると、「努力次第で将来は切り開ける」、「仕事以外に生きがいがある」に肯定的な回答をした者は6割を超える一方、「自分の生活は周囲の人から上手くいっていると思われる」、「将来の見通しは明るい」、「経済的に自立している」、「現在の生活に満足している」に関しては、3割を下回っていた。また、JILPTによるワークスタイル調査の高等教育卒業者と比較して、この結果は、前2者を除き、かなり低い値であった。
- ③ 中退時に抱いた悩みや困難について、自由回答(N=621)を検討したところ、「求職活動・仕事」や「将来展望・人生設計・社会復帰」に関する悩みや困難が最も多く見られた。また、「人間関係・家族関係」や「金銭面・奨学金返済」に関するものもそれについて多く挙げられた。

## 参考文献

- 小林雅之・圓入由美, 2014, 「専修学校制度の概要と本調査の概要」, 平成25年度生涯学習施策に関する調査研究『「専修学校における生徒・学生支援等に対する基礎調査」調査研究報告書』東京大学政策ビジョン研究センター, pp.1-23.
- 文部科学省, 2014, 「(報道発表) 学生の中途退学や休学等の状況について」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/10/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf) 最終アクセス: 2015年4月1日).
- 労働政策研究・研修機構, 2006, 『大学生の就職・募集採用活動等実態調査結果 II——「大学就職部/キャリアセンター調査」及び「大学生のキャリア展望と就職活動に関する実態調査」』JILPT 調査シリーズ No.17.
- 労働政策研究・研修機構, 2012, 『大都市の若者の就業行動と意識の展開——「第3回若者のワークスタイル調査」から』労働政策研究報告書 No.148.



---

JILPT 調査シリーズ No.138

大学等中退者の就労と意識に関する研究

発行年月日 2015年5月28日

編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

〒177-8502 東京都練馬区上石神井 4-8-23

(照会先) 研究調整部研究調整課 TEL:03-5991-5104

印刷・製本 有限会社 太平印刷

---

©2015 JILPT Printed in Japan

\* 調査シリーズ全文はホームページで提供しております。(URL:<http://www.jil.go.jp/>)